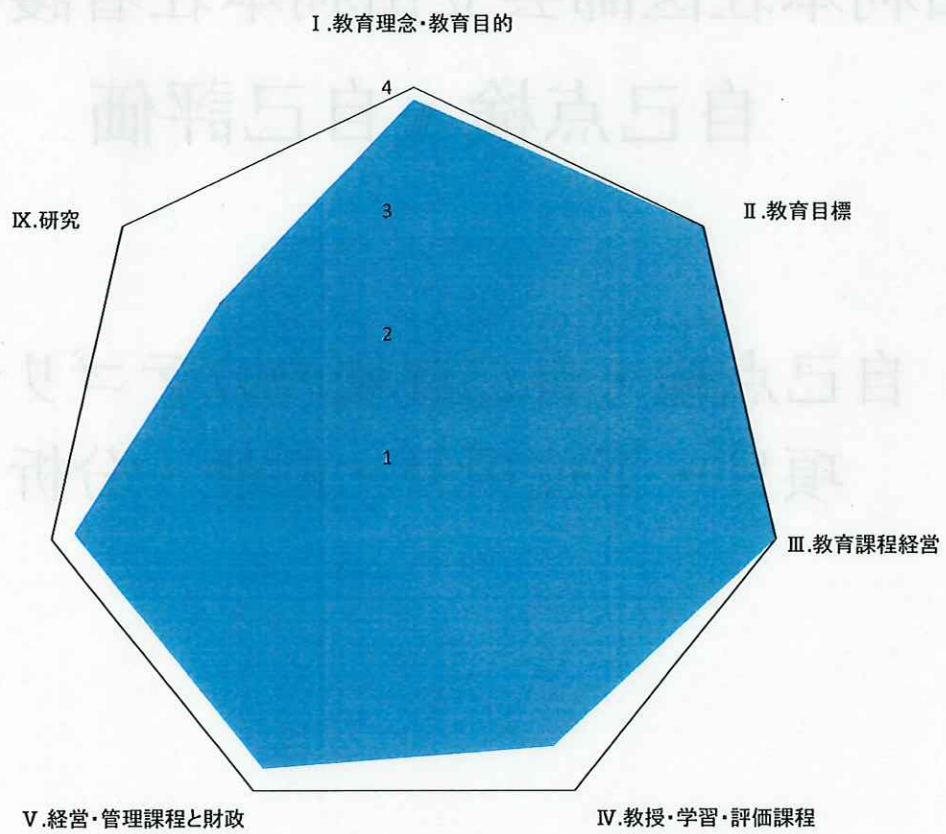


令和5年度 自己点検・自己評価 各カテゴリー平均点

- I : 3.9
- II : 4
- III : 4
- IV : 3.6
- V : 3.8
- VI・VII・VIII : 3.8
- IX : 3



令和5年度自己点検自己評価総評

「自己点検自己評価表」に基づき、看護教育の充実を目指し、令和5年度の自己点検自己評価を実施した。カテゴリーⅨに分類した下位項目 178 について、それぞれのカテゴリーの担当が評価した。

カテゴリーの平均点をみると、評価基準が 1~4 の範囲の中での平均であるため、3.0~4.0 と平均幅が小さい。カテゴリー平均評価は、3.7 である。

カテゴリーⅠ：平均 3.9

すべて評価 3.0~4.0 である。「医師会」としての独自性については、教育理念教育目標で「地域社会」を由利本荘にかほ地区に限らず大きな意味を含めることを明示している。さらに、地域に貢献できる人材の育成として、在学中から意識できるよう教育している。

「専任教員の学習環境」については、学生数の減少により、領域実習指導に携わる時間数が減り、学内で講義の準備等に充てられるようになったが、時間的配慮の余裕のなさは継続されている。また教員の自己研鑽の時間的確保が必要であることも引き続き課題である。

「教育理念・教育目標に対する評価」では、就業先へのアンケート結果も参考にしているが、「育てたい学生像」を明確にしているので評価 4 としている。

カテゴリーⅡ：平均 4

「教育理念・教育目的に沿った評価」については、新カリキュラム改正に教育目標の見直しを行い継続しているため、評価 4.0 とした。

カテゴリーⅢ：平均 4

教育課程経営における、教育目標と科目目標が連動しているため、評価は同じである。また、「当校の特色に合わせた科目構成」については、新カリキュラムでの各領域の見直しを行っており、特徴が明確化されたので評価 4 としている。

カテゴリーⅣ：平均 3.2

各教科において、領域担当が責任をもって振り返り評価を行い、課題を解決できるように取り組んでいる。各領域の評価において、「クラスの特性に対しての適切な指導方法」「教育指導方法の改善のためのフィードバック」が評価 3.0 であった。各クラスの特性を考慮した教授方法で講義を行っていくことが次年度の課題である。

カテゴリーⅤ：平均 4

設置者の意志における「教職員に理解できる体制」では、十分に理解されていない現状であるが、医師会と看護学校との協議において将来構想を行っているため、評価 4 としている。

「財政基盤」についての説明は、医師会に置いて「予算委員会」「理事会」に

て明確になっている。また経営についての説明等は管理において必要時行う事とするため、評価4としている。

「奨学金」については、入学時、設置主体である医師会病院の奨学金制度や学生支援機構等の奨学資金の説明をしている。学生の生活支援では、随時クラス担当や領域担当が強化する体制を整えている。今年度は、ハラスメントのガイドラインを作成し相談窓口を明示している。そのため評価4の継続である。

「自己点検自己評価の体系」の項目では、平成26年度より開始した評価が継続され4とし、教育評価改善に繋がっている。

カテゴリーVI・VII・VIII：平均3.6

このカテゴリーは、卒業後に着目する。令和4年度卒業生を対象とした施設へのアンケートを実施した。昨年同様、本校の学生特徴として「素直」「誠実」であった。一部の学生が高評価をうけていたが、「自主性が足りない」「学習不足」などの負の特徴も見受けられる。

看護師として必要な「素直さ」「誠実性」「勤勉性」を有する学生たちを育てている事を認識し、主体性等負の特徴を見据えた関わりが必要である。日頃の教育の場面を大事にし、必要な場面を逃がさず指導ができる教員の資質も重要であると思われる。また、今年度は県からの要望で高校生を対象に「看護の仕事」についての講義を行った。今後も依頼があれば積極的に受けていく。

今年度は5月にコロナの規制が緩和され、学校祭やオープンキャンパスが開催され、地域と交流の機会をもつことができた。しかし、コロナ前と比較すると格段と交流の機会は減っていることから、評価3としている。

「帰国者」の受け入れについては、中国で教育を受けた学生が看護師となり活躍している現状ではあるが、今後、依頼があれば整えることを考えたい。そのため評価2としている。

カテゴリーIX：平均3.0

「研究」は教育に対する教員の活動である。学生へ「看護研究指導」をしている責任から、また自身の能力向上のためにも研究の取り組みは必須と思われる。しかし、現在、研究活動に必要な時間・財政支援・環境等は整っていないため、評価2とした。激務の中、教員個人の研究に充てる時間を都合するのは難しく、また余裕もない。さらに、財政的に研究費として予算を組むことは難しい。そのため研究活動は自らの負担が大きい現状にある。しかし、「研究活動」として、秋田県看護教育研究会等での発表は順次行っていくこととしている。令和5年度は、担当であった教員2名が、令和6年度に発表・投稿を行う予定である。教員が学会等において研究発表することは、本学校の教育の質の向上と本校の社会的認知の向上に繋がるので、重要必須課題として継続したい。

文責：齋藤 晃代